

能となった。この結果を模式化すると、以下に示す様になる。

諏訪盆地部 → 非農村地域 → 中間地域 → 純農村地域 → 観光化地域
標高 700 m～ 800 m～ 900 m～ 1,000 m～ 1,200 m<

こうして自然的見地から得た南北性の区分と、人文的見地から得た東西性区分を総合したものがここに掲げた地域区分図である。Aが非農村地域、B.C.Eが中間地域、D.F.G.Hが純農村地域、そしてIが観光化地域である。

この地域の農業は今、諏訪工業地域との兼業化進行によって大きく変貌しつつある。「請け負い農業」「委託農業」という新しい形態の農業が生まれ、大規模専業と自給的兼業農業という両極への農民層分解が著しく進んでいるのである。

埼玉県大利根町における農業の地理学的考察

葛原 奈緒美

(1) 目的

北埼玉郡大利根町は埼玉県の東北部の利根川沿いに位置している。大利根町の基幹産業である農業は水稲生産を主体として、近年裏作としてのイチゴ栽培が盛んになっている。また都心から50 Kmの距離にあるため兼業化の進展も著しいし、町の東部の栗橋駅近くの旗井地区では宅地化が進行しつつある。このようなごく平凡な農業経営地帯の大利根町の農業を通して、その地域性をとらえることを目的として研究を進めることにした。

(2) 方法

まず大利根町の農業構造を踏まえた上で、地形と土地改良という2つの視点からの考察を進めて行った。そこで見出された地域差が集落段階でどう農業に反映されているかを農業集落カードや土地利用調査・アンケート調査による資料を使って調べてみた。

(3) 結果

大利根町の位置は関東構造盆地の中心に当り、そのため古来利根川が乱流して自然堤防が発達している。このような地形に規定された自然堤防一畑・後背湿地一水田といった明瞭な土地利用の違いが長く続いた。これは自然堤防上では用水の確保ができなかったためであった。

一方、大利根町では明治以来4つの土地改良事業が実施された。それらは時期によりその内容を少しずつ異にした。戦前は後背湿地の水田地帯がその実施地域であったが、戦後は自然堤防地帯において基盤整備が行なわれた。これは戦後各農家の手によってなされていた畑に揚水して水田として利用する陸田化を安定させたとと言える。土地改良事業が支えた陸田化により、地形の違いを解消して、現在では水田率91%を示し土地利用的にも単一になった。

畑作物の陸稲が水稲に代わると共に、水田の裏作物としてそれまでの麦に代わって、昭和30年から導入されたイチゴが浸透した。イチゴ栽培も露路からビニールハウスによる施設園芸へと移行し、現在施設園芸農家率23%である。イチゴ栽培は排水条件が良いことから自然堤防地帯で盛んになっ

ている。

自然環境である地形条件に影響されていた土地利用が、戦後の日本農業の米作指向による陸田化の中で実施された土地改良事業等により土地生産性を向上させた。しかしこのことは農業の機械化に伴ない兼業化を進める結果となっている。今後は土地生産性の向上を目指すと共に、兼業農家の耕作不能の耕地を専業農家に貸して規模の拡大を図ることが必要と思われる。

小松市の工業に関する地理学的考察

四ヶ浦 京子

人口約10万をもつ石川県小松市は、第2次産業のウエイトが高く、石川県においても、その生産活動は大きく、金沢市と並ぶ主要工業都市として位置づけられる。工業の内容は伝統的な絹織物から発達した繊維工業と、大正時代に当市に創立した「小松製作所」を主軸に発達をみた機械工業、及び市の工業に占める比重は小さいが、特色ある九谷焼工業などがある。

論文では、このような小松市の工業の発達過程をたどりながら、工業化によって、当市がどのように変容してきたかを考察し、さらに、現在の工業の地域構造を明らかにしようとしたものである。

Ⅱ章では、工業化段階を都市化と関連づけて、3つの時期に区分した。以下は、その時期区分である。

・Ⅰ期（江戸～明治）・・・農業の副業として発達した絹織物が明治に入り、市街地に工場制の工場を発達させた。この時期は、工業化の萌芽期である。農村地域は、絹織物の原料供給地として養蚕業の発達をみた。

・Ⅱ期（大正～第2次世界大戦）・・・新たに機械工業の発達をみ、今日の機械・繊維工業を主軸とする業種構成が確立する。繊維工業は近代化され、最盛期を迎えるが、一方、農村地域では、養蚕業の没落とともに、農業労働者から、工業労働者への変動がみられ、戦時体制下では、さらにその傾向が強まる。工場立地も、従来の市街地外延部に限られていたのが、小松製作所粟津工場の郊外への進出をきっかけに、郊外にも都市化を引き起す要因となる。

・Ⅲ期（戦後）・・・戦後、特に30年代以降日本経済の高度成長に伴い、当市でも、工業化・都市化の進展をみる。農村地域では、農地転用面積の増大、農家数の激減をみる。

しかし、小松市の工業化の特徴は、地元資本の工業が時代とともに発達したもので、外部からの大企業の進出にみる急激な工業化・都市化はみられない。Ⅲ章では、このような小松市の工業の現状を考察するとともに、市の工業の地域構造を明らかにし、Ⅳ章で総括して、工業の特色と問題点を上げた。以下、その問題点となるものである。

小松市の工業の特色として、業種構成の著しい偏りがみられる。即ち、機械工業と繊維工業に特化しすぎており、この2業種で市の工業出荷額の9割以上、従業者数の8割以上を占めている。特に、機械工業は、小松製作所1社とその下請工場のみで成り立っており、大げさに言えば、大企業1社に市の50%以上が左右されている状態で、問題がある。一方、繊維工業は、伝統的な小幅織物を主力